

# 出羽辨考

——榮花物語の作者説を疑う——

## 中山昌

一條朝から堀河朝に至る八代約百二十年間は我文學史上、和歌物語、日記、隨筆に多數の女流作家が登場し、最も華やかに活躍した時代である。而してその殆どが宮廷を中心とする女房や貴族及び受領階級の子女であつた。都中心の泰平の生活や後宮制度が才媛を集め、女子の地位を高め、四季の行事遊樂が文才藝能を競わせる結果となつた。ここに述べる出羽辨はそうした女性の一つの典型的な存在であつた。出羽辨の作品と人を中心にした諸點を考究することとしたい。

### 一、作品

### 二、周邊

### 三、生涯及び人

### 四、榮花物語作者の是非。

### 〔一〕作品

#### 1 勅撰集

勅撰集に於ける出羽辨の歌は

書名 歌數 部 類

後拾遺集 五 春下、哀傷二、雜五二、

金葉集 一 戀下、

詞花集 二 秋、雜上、

新古今集 一 雜下「やま」、

新勅撰集 一 雜五、

玉葉集 四 春上、賀、雜四二、

續後拾遺集 一 雜中

新千載集 一 戀一

新拾遺集 一 哀傷

新續古今集 一 雜上

計十八首が數えられる。

註1 後拾遺哀傷の部の

他との出入

〔註1〕榮花「晚待星」

「紫野」各一

大納言經信集

祐子歌合「秋」

〔註2〕榮花「晚待星」

榮花「晚待星」

六條歌合春十二

番「若草」

榮花「蕭るは佗

しと歎く女房」

「晚待星」各一

出羽辨集

大納言經信集

出羽辨集

いかにしてうつしとめけむ雲居にて飽かず隠れし月の光を  
は榮花物語「紫野」では「故院の御子と言はれける中納言の  
作」とある。  
一女御殿の人の歌なりける

## 註2 新古今雜下の

たきつせに人の心を見ることは春に今もかはらざりけり  
は後朱雀院御歌とあるが榮花物語「晩待星」には院の御方に  
出羽辨となつてゐる。榮花物語の方が正しいと思はれる。

## 2 出羽辨集

自撰私家集と思われる。成立年代は不明。集中に源經信をうま  
のかみ、頭の辨とよび、藤原泰憲をあふみのかみと云つてゐる處  
から之等の官職考によると永承、治暦、延久の頃に當るので、卷  
頭の「おこなひに心いりて正月ついたち星なるにさすかにつれつ  
れに云々」の詞書にて「長らふる我身そつらきなり」とも頼し人  
も問はぬ春まで」(續後拾遺)に始まることから出羽辨が老境  
に入り修行生活の傍ら筆を執つた感がする。

制作動機としては赤染衛門集卷末に「關白殿(頼通)に集ども  
集めさせ給ふと『此處に有らん參らせる』と仰せられたれば云  
々」の如く頼通の相當廣範圍に及ぶ私家集々成事業の(範永・經  
衡等も同様)應命作かとも考えられる。

内容は和歌九十五首(禁裏本以外は九十三)、内出羽辨作五十一  
首で、贈答歌及び、日記風の詞書が非常に多い。新春に始まり秋  
で終り、折々の事がほぼ季節の順に集録されてあるが年代の書入  
れはない。結びと思はれる詞もないのでまだ書き續けられようと  
したのか、散佚して了つたのか分らない。勅撰集に二首(續後拾

遺、新續古今)入つてゐる外にはこの集の歌や記事を榮花物語に  
も歌合にも他の家集にも取入れていない點、長く人目に觸れなかつたものか他にも辨の家集があつたものか、或は辨の意圖によるものか疑問である。

傳本は群書類從本、續國歌大觀、彰考館本二本及び宮内廳書陵部藏禁裏本がある。群書類從本には寛政二年二月末書寫の奥書がある。禁裏本以外の四本に第五十三、第五十四の歌及び前後の詞書三百四十字を缺いてゐるが明らかに脱落と見られ、詞書の字數も多くなつてゐる。其他に餘り大きい異同はみられない。書かれてゐる人物も殆ど上東門院に出入した人々で、榮花物語、紫式部日記、祐子、祿子兩内親王家歌合等と一致してゐる。

## 3 歌合

歌合はこの時代最も全盛をきわめ、公のもの、後宮サロンのものと大小規模も様々であつた。散佚し易いもので斷簡や目錄のみ残存するものもあり未發見のものも相當にある状態である。出羽辨に關するものも和歌合抄卷五に祐子内親王家歌合四度が見えるのに内容は一度のみ残存、祿子内親王家歌合のうち「比々名」は目錄のみで、鷹司殿歌合は斷簡に辛うじて一首が見られる次第で恐らく辨の作歌の實數はまだ可成りあるものと考えられる。分つてゐるものを擧げる。

### (註3) 六條齋院歌合

#### 年代不明

夏六題

一首

永承五年二月三日

春十二番

二

永承五年五月

菖蒲三題

一

同	六年正月八日	瀧音知春他	三
同	天喜三年五月三日	物語	三
年代不明		春十二番	二
同		五月雨有餘	一
同		六月被他七番	二
同		遠聞郭公十二番	二
同	八月	秋十五題	三
同		秋立五番	一
同		九月十三夜五番	一
鷹司殿歌合斷簡			
年代不明		七番	一
祐子内親王歌合	又ハ萬倉一の宮 (賀陽院歌台永承)	十八番	三
永承五年六月五日			
祿子内親王家歌合			
康平七年十二月晦日	十番斷簡	一	
治暦二年九月九日	菊五番	一	
同 四年五月五日	夏十二番	二	
同 十二月廿二日	呂保殿、日記	二	
延久二年正月廿八日	家梅始開十番	二	
即ち、六條齋院二十一首、鷹司殿一首、祐子内親王家三首、祐子内親王家八首、計三十三首(内重複一)六條齋院「秋立五番」近衛家「大手」藏「所收」と祐子内親王家「康平七年十二月晦日庚申斷簡」富田家藏「がせの音そしるく聞ゆるゆふまくれけふたちかはるあきのめを」△第五句後者はしめ、とありVがある。			

註3 六條院とは祐子内親王が寛徳三年御年九歳で齋院に立たれ、天喜六年御病の爲退下されるまでの稱で、以後は祐子内親王家であるが歌合整理の際兩歌合が混同されたり、斷簡による重複が生じたと考えられる。

呂保殿歌合日記(群書類従一八一)とは治暦四年十二月廿三日(曆の上でこの年の庚申は廿二日)庚申に祐子内親王家歌合が呂保殿(香爐峯の障子圖のある殿の意)で催された際歌合の前後に書かれた記録を言い「日記ハ出羽辨カクトイフ」の註がある。二十卷本系には日記を缺く。「こよひろほとのはさまにて。かしを守らせたまはむとてうたあはせありひだむのかたむだにまいる。いては。みまさか。以下略 右の方人にまいる。みやとの。中將。以下略。題五首をたまふ。月光似氷、雪埋松、以下略。これなり。はたみかのれいいいたるつきもかけたかく。ちちたる雪のよも。とりのこゑあかつきをつけたるにつかひをはりぬ。左右のかたむだうたなきは その名をかかずかし」とあつて歌を排列し、判(勝負)なく最後に「日記は女すらもすへきわざならむよ。わすれぬさきにとめよと。おほせことありしかば。またかきつけてこそはへめれ。治暦四年十二月廿五日のよのみわさにて南。こよひうたよみし人々。みまさか。こま 以下略」と歌合の題と左右の人の名等を極く簡単に記したもので永承五年の祐子内親王家歌合や榮花物語に書かれた内裏歌合の如き堂々善美を盡した規模でもなく、男子の眞名文による正式の記録でもない。女のみの非公式サロンの雰圍氣がうかがえる。

以上の四歌合に於ける主な女房の歌の數は、

女房名

様子 六條 鷹司 祐子 計

宣旨(せじ)

さいも(左門 左衛門)

はりま

やまと

いづも

むさし(武藏)

さがみ(相模)

みまさか(美作)

しきぶ(式部)

いては(出羽)

こしきぶ(小式部)

こま(小馬)

なかつかさ(中務)

宮殿

典侍

兵衛

小辨

たば(たじ、丹後、丹後同一人)

伊勢大輔

出羽辨は四歌合に内容残存二十六度中十九度出席し、三十三首の多くの出詠を見せている。勅撰集へは祐子内親王家歌合の「鹿」が詞花集「秋」へ、六條齋院春十二番「若草」が玉葉集「春上」へ各一首が入っている。

4 榮花物語

榮花物語に出羽辨の名前が出て居るのは後篇又は續篇と云われている卷三十一から卷三十六の六卷である。

巻名

歌数 記事

年代

備考

駿上花見

1

1

長元六年

山宮の歌中宮權亮兼房と贈答

歌合

1

2

長元六、七

院伊豫中納言と歌

さるは侘しと歎く女房

11

7

長元九

中宮威子薨去

晩待星

7

9

長曆元

一品宮皇子參内、最勝講根合、辨風

蜘蛛のふるまひ

1

1

寛徳元

法成寺御堂念佛

根合

3

3

寛徳二

後朱雀帝崩御、雪見皇子司炎上鷹司殿へ移る

紫野

(1)

(1)

寛治二

拾遺集哀傷に辨作

計

24

(1)

(1)

寛治二

榮花物語全四十卷より主だった人の歌の数は

人名

歌数

人名

歌数

藤原道長

一七

一七

辨乳母

九

藤原公任

一五

一五

大貳三位

二

上東門院

一〇

一〇

和泉式部

三

紫式部

三

三

源經信

二

赤染衛門

七

七

出羽辨

二四

伊勢大輔

五

五

又八

五

歌數では最高の二十四首或は五首を數え有名歌人を遙か上廻つて  
いる。而も出羽辨の歌は物語の部分に織り込まれ各卷に分布して  
いる。このうち勅撰集に入るものは、

後拾遺集 哀傷(晩待星) 哀傷(紫野)

新古今集 雜下(晩待星)

新勅撰集 雜(晩待星)

玉葉集 雜(きるは佗しと歎く女房) 雜(晩待星) 二

計六首である。然し榮花物語中に出羽辨作となつてゐる歌は家集  
や歌合や他の人の私家集とは重複していない。

卷三十一「殿上花見」に中宮權亮兼房と山菅の歌の贈答で初め  
て而も突然出羽辨は名を現わし以下六卷に亘り斯くも頻出して  
いる。思うに出羽辨に關するものが上篇及び第三十七卷以後にも若  
干ある筈でそれが別の女房名になつてゐるとか單に中宮女房とか  
一品宮侍女とかの略稱によるため判然と掴めないのではないかと  
いう事である。榮花物語初出の長元六年は私考による推定年齢三  
十九歳で而も相當の地位權勢を得てゐる。又永承元年(一〇四六)  
三十七卷以後は歌合で延久二年(一〇七〇)七十六歳の頃迄約二  
十年間頻りに活躍してゐる。この榮花物語に名を見せなくなつて  
以後の二十年の彼女の動き殊に榮花物語との關係、又長元六年  
(一〇三三)より永承元年(一〇四六)に至る十三年は榮花物語  
の主として扱つた冷泉朝から堀河朝に至る約百三十年の一割にし  
か當らぬ短年月であるに拘わらず出羽辨に關する記事や歌が斯く  
も多數を含むことは注目すべき事である。

## 5 私家集

出羽辨に關する記事及び作品を扱つた私家集は出羽辨集の他に  
次の三集がある。

(一) 大納言經信集(帥大納言家集) 源經信没(承德元年) 後近  
親者の手に纏められたもの。三系統本がある。即ち書陵部二本と  
神宮文庫本等流布本とである。出羽辨との贈答歌二十六首、うち  
十二首辨作(金葉 新拾遺集に各一首入る)

よもすから雪ふる夜、物語してあけほのにかへり侍て、つと

めて出羽辨か許より

金葉 金、ますらひて  
をくりてはかへれとおもひしたましひのゆきさをはれてけさは  
なきかな

返

ふゆのよのゆきけのそらにいてしかとかけよりほかにおくりや  
はせし

又辨への贈歌二首に日記體長文の詞書がある。

(二) 範永朝臣集(藤原範永自撰) 頼通の家集々成事業の應命作  
と思われる。傳本書陵部二本とも損傷甚しく錯亂あり。出羽辨に  
關するものは更にある筈であるが、と明記せるもの出羽辨作二首  
あるのみ。範永の「月いつると入といつれみるにまされりといひ  
にやりたりしに、一品宮のいてはの君がいひたり」と問答めいた  
詞書を附したものの等兩者の親交を思わせるものがある。

(三) 經信卿母集(帥大納言母集) 初出十四首が母自作で、近親  
者の手によると思われる後記に母の逸話や作品が書き繼がれ、こ  
の中に出羽辨との交渉二つ、即ち辨と女房仲間らしい七夕の贈歌  
と經信若年の北野車渡りに就いての話がある。歌一首は出羽辨作

と思われる。

6 後世文獻に見えるもの

(一) 今鏡「すべらぎの上」の「子の日」に出羽辨作として後拾遺集雜五と哀傷の

春毎の子の日は多く過ぎぬれどかかるふたばの松はみざりき  
いかにしてうつしとめけむ雲居にてあかずかくれし月の光を

「藤波の上」に後拾遺集の大貳三位との贈答の

春の日にかへらさりせば古へのたもとながらやくちはてなまし  
が見える。

(二) 十訓抄 第一「可<sub>レ</sub>定<sub>二</sub>心操振舞<sub>一</sub>事」の「清少納言香爐峯雪。紫式部等十六人女房、四納言と漢の四皓云々」の項に「清少納言 紫式部 赤染衛門 和泉式部 小式部内侍 小大君 伊勢大輔 出羽辨 小辨 馬内侍 高内侍 江侍從 乙侍從 新宰相 兵衛内侍中將などいひてやさしき女房どもあまた有り云々」とあり「帝（一條）も『我人を得たる事延喜天曆にも超えたり』とぞ御自讃ありける」とある通り一條朝女房として出羽辨を擧げている。

第六「可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>忠信廉直<sub>一</sub>事」の菅家大宰府の飛梅の所に、故郷の歌として後拾遺集春下の「世尊寺の桃の花」を詠んだ辨の歌が引かれているが作者名はない。

(三) 平家物語 卷三「少將都歸」に丹波少將成經が許されて都へ歸る途次父大納言の没した配流の地の楊梅桃李の花の梢に立ち父をしのぶ件りに菅家の「東風吹かば」の歌に和漢朗詠集の「桃李不言春幾暮 煙霞無跡者誰栖」と並べ辨作の「世尊寺の桃の花」

の歌が書かれているが之も作者名はない。按ずるにこの歌は當時相當弘く人口に愛誦されていたものであろう。

故郷の花のもののいふ世なりせばいかに昔のことを問はまし

四 百人一首改觀抄追考 契沖の「百人一首改觀抄」の延享五年刊の追考で樋口宗武の説といわれるものに「・・・第三十一殿上花見巻は萬壽五年と長元二年と三年の記をもらして長元三年より書きはしめしと見ゆ。赤染衛門この巻にいたりてもつつけてかは年記さたかなるべきこと也。さるを此巻より出羽辨の歌初めて出たれはもしくは以下十巻は出羽辨のつつけかけるにや云々」がある。出羽辨は榮花物語續編作者と考えた卓説とされている。

(四) 春漢浪話 土肥經平が安永年間に著した國史國文の考證及び隨筆で、この中で「此の十帖の内に出羽辨の歌多く出でたるに思へば此出羽辨の筆になるか」といつている。作者論として現代に承け繼がれているもの。

## 〔二〕周邊

出羽辨の人及び當時の朝廷や歌壇の動きを知る上にその周邊を調べる事は非常に大切なことで榮花物語との關係に及ぶ重要な意義が存するのであるが紙數の都合で別項に譲り茲では進行上主な人の名を擧げるにとどめる。

宮廷關係 彰子（九八七—一〇七四、上東門院）榮花物語全篇に登場、出羽辨は長く寵をうけ出入した。威子（九九九—一〇三六、後一條帝中宮）上東門院の妹で同じく道長女、出羽辨はこの中宮の侍女となった。一品宮、章子（萬壽三年誕生、後冷泉帝中宮、

二條院) 後一條帝と威子中宮の第一皇女、御幼時より立后後も長く宮仕えしたものの如く一品宮出羽の名が榮花物語や歌合に散見される。祐子内親王(長暦二年誕生、三品宮 高倉一宮) 後朱雀帝第三皇女、母は具平親王女姫子。和歌を好まれ盛大な歌合を頼通主催で度々催された。同内親王家には紀伊、駿河、菅原孝標女等の歌人才媛が多かつた。祿子内親王(長暦三年誕生、六條齋院) 後朱雀帝第四皇女、祐子内親王と同母、幼くより和歌を好まれ、天喜六年狂病にて齋院退下後も歌合を催され前後記録上二十五度が見える。就中「物語合」「呂保殿歌合」は重要視されている。辨は十七度参加している。

藤原氏關係 頼通(九九二—一〇七四)父道長に次いで後一條後朱雀、後冷泉三朝の關白としての權勢は榮花物語續篇にも詳しく、歌合、各私家集にも力を盡した。彰子はじめ三中宮に仕えた出羽辨は自然頼通に接近の機會が多かつた。鷹司殿(九六一—一〇五三)源雅信女、道長室倫子。彰子 威子 妍子 頼通 教通の生母。上東門院關係で出羽辨も出入し、七十賀(「歌合」)鷹司殿歌合に出詠している。

私家集關係 大納言源經信(一〇一六—一〇九七)道方男、俊頼父。帥大納言として大宰府にて没した。詩文管絃等博學多藝、勅撰集に八十七首がある。當代隨一の歌合判者であり、「難後拾遺」で通俊に痛烈な批判を試みている。家集に出羽辨との細かい交渉や戀歌の贈答が見られ、榮花物語、歌合に同席している。經信母(源國盛女)公忠 信明等三十六歌仙の系統に生れ、一族に爲善、道濟等歌人が輩出している。家集の追記によれば良妻賢母

の典型で出羽辨とは心を許した友であつたらしい。藤原、範永(永承六年大膳大夫)尾張仲守清男。六人黨の一人として頼通邸に出入した。家集に出羽辨に關心並ならぬものがあり、歌合 榮花物語にも兩者の交渉がうかがえる。

女房、上東門院及び威子、章子中宮關係と歌合、出羽辨集に登場する女房は多くが同じ人物で夫々が辨と共通點をもち、密接な生活をしているので詳しく述べたいが前述の次第で省略する。伊勢、大輔、長保二年—長和元年の間に紫式部、和泉式部と前後して宮仕。赤染衛門、鷹司殿にも仕え、長久二年迄の歌がある。大江匡衡の妻。相模(乙侍從)定頼、大貳資通と情交あり、大輔・衛門と共に女房最右翼歌人。やまと平雅仲女、左衛門(さいも、加賀左衛門)女院のさきものないし(紫式部日記に日本紀の局とまきちらしたとあり)大納言さき、宰相君 丹後内侍(雅通女)こま(範永朝臣集に清少納言女とある)大貳三位(辨乳母、典侍越後辨)美作、出雲等は殊に上東門院以來親睦な間柄であつた。後年四條宮下野や周防内侍(平繼仲女)道方女(四條宮宣旨)等も關係があつたと思われる。

男子 經衡(延久四年没公業男)六人黨の一人。近江守泰憲(泰通男永承元年近江守)但馬守實綱(資業男)齋院長官長房、中宮權亮兼房(兼隆男)。源爲善(長久三年没、國盛男)隆國(治暦三年權大納言、俊賢男、宇治大納言物語作者)能因法師(永延二年生、橘永愷)。定頼(公任男)長家(康平七年没、道長男)等が擧げられるが中宮職及び歌合での交渉が多く、特に戀愛關係と見る程のものはない。この中、隆國(後拾遺哀傷)長家(新勅撰)

〔三〕出羽辨の生涯及び人

系圖

尊卑分脈

平氏

桓武天皇—葛原親王—高棟王—惟範

瑠材 惟一 女子 大和  
 生昌  
 後撰作著  
 時望 直材 從五位下出羽  
 季信

女子出羽後拾遺五

重義——棟仲

朝範  
金葉作者  
後拾遺作者

後拾遺  
金葉  
詞花  
新勅  
等作  
者一  
イ三一五

行義一範國

經方——女子

時信  
時忠

### References

理義—定親  
左大辨攝津守伯耆守  
後朱雀院侍讀

出羽辨の傳記は殆ど知られていない。系圖によれば高棟王の流れの平民で辨の伯父親信の後裔に清盛妻で建禮門院母の時に、後白河后高倉帝母の建春門院滋子等が出ている。惟範は寛平五年肥前守、後守輝官、曾祖父時望は延長三年伊豫守となり、後撰集歌人、祖父直村も伊豫守、父季信は寛弘元年出羽守に任ぜられて、「間九九月十一日獻馬十疋」と御堂關白記にも見えている。伯父親信も筑

後守より寛弘二年備中守へと歷任し榮花物語「浦天別れ」に越後守で男孝義を誡める逸話が出ている。同じ巻に惟仲の事が長徳三年頃の記にあり、柴式部日記寛弘六年の記にも見え、その弟子昌昌は中宮大進として枕草子に清少納言との逸話のある人。其他一門には藏人、國守として名の見えるものがあるが朝廷には藤原氏のは

勢力が絶えてこの一門は政治の重要な地位には着けなかつた様である。家集中に兄が辛うじて筑後になつた事を「埋木の花」と詠んでいる。平氏勃興迄朝廷周邊の中堅を保つていたと考えられる。又系圖中には辨と昵懇であつた大和をはじめ朝範、忠快、周防内侍、紀伊等勅撰歌人が輩出している。

なお勅撰作者部類では出羽辨を加賀守季信女とあり、呂保巖歌合後記には「上東門院女房、後三品宮ニマイル。出羽守平秀信女仍出羽辨トヨブ」となつて居る。太日本史表では「姓缺季信寛弘元年出羽守」とあるので辨及年度は定かでないが越後辨の由來に徴すれば女房名もこの邊から生じたものと思う。

次に**出羽**の年齢に就いては諸説あり、與謝野説に依ると治暦三年六十歳で寛弘五年（一〇〇八）頃の誕生となり後一條帝と略々同年。又後一條院乳母とすれば（日本文學辭典）寛弘五年を二十歳位と見ねばならず、十訓抄の十六女房の一條朝と同年代となる。然し源經信（長和五年生）と戀愛歌贈答や經信母との交渉、



上東門院出仕、歌合、榮花物語に於ける兼房、定頼、能因、範永  
伊勢大輔、大貳三位、隆國寺との年代の均衡、更に「浦々の別」  
（長徳三年）に於ける伯父とその子の記事、其他紫式部（長和三年  
没）と直接交渉の記録なき事等綜合すると父が寛弘元年出羽守  
拜命後寛弘未出仕したと考へ寛弘五年十三歳位とし、長徳二年出  
生と推定したい。年譜は

長徳二年（九九六）伊周、隆家配流（榮花・浦々の別） 一才  
長保元年（九九九）彰子入内（かかやく藤壺） 四  
寛弘元年（一〇〇四）父季信 出羽守となる 九  
同 五年（一〇〇八）後一條帝御誕生（初花・紫式部日記）十三  
同 八年（一〇一一）一條帝崩御 十六  
長和三年（一〇一四）紫式部没か 十九  
同 五年（一〇一六）源經信生る 廿一  
寛仁元年（一〇一七）後一條帝即位 廿二  
同 二年（一〇一八）威子入内 廿三  
萬壽三年（一〇二六）彰子出家上東門院と稱す（衣の珠）章 廿四  
子内親王誕生（わか水） 卅一  
同 四年（一〇二七）道長薨（鶴の林） 卅二  
長元元年（一〇二八）榮花物語上篇終 卅三  
同 三年（一〇三〇）榮花物語續篇始 卅五  
同 七年（一〇三三）「殿上花見」に出羽辨初登場 卅八  
同 九年（一〇三六）後一條帝、中宮威子崩（きるは佗しと  
歎く女房） 四十一  
寛徳元年（一〇四四）最勝御八講、有心なること（晩待星）

永承元年（一〇四六）皇子立后、根合巻にて辨の名 榮花物 四十九  
語に見えず 五十一

同 五年（一〇五〇）六條齋院 祐子内親王家 兩歌合に初 五十五  
めて出羽辨登場

天喜元年（一〇五三）鷹司殿倫子薨 五十八  
天喜一康平 歌合に屢々参列

治暦四年（一〇六八）呂保殿歌合に辨の日記 七十三

延久二年（一〇七〇）祿子内親王家歌合に辨の名を見る最終 七十五

承保元年（一〇七四）頼通、上東門院（八十七歳）薨（布引） 七十九

寛治二年（一〇八八）後拾遺集哀傷の出羽辨作と同歌中納言 九十三  
君作として入る（紫野）この頃院政に 入る

寛治六年（一〇九二）榮花物語續篇終 九十七  
承徳元年（一〇九七）源經信没 百二

延久二年以後辨に關する記録が見えないこと、あれ程慕い上げて  
いた上東門院薨去に關する辨の記録が見當らないこと等から承保  
元年以前七十八、九歳で没したか或は老衰等で手記が残らなかつ  
たものかと考えられる。

按ずるに宮仕は十代少女期一條朝の終り頃彰子中宮へ出、其後  
長く上東門院關係に出入したものであらう。上東門院の妹威子が  
後一條中宮に入られた頃をちらへ参り、中宮薨後御子一品宮章子

内親王に侍し、繼て後冷泉中宮となられるに及び中宮女房となつた。一品宮出羽辨の時代が全盛期で十餘年間仕え、昌保殿後記の「三品宮」が一品宮の誤りでないならば祐子内親王であるから或は中宮の許を退き内親王家へ出入したものと考えられる。榮花物語も永承元年以後辨の名が見えず、後は専ら二十餘年間歌合に登場している點から祐子、藤子兩内親王家に歌のお相手に參つて見たと見るべきであらう。歌合鷹司殿斷簡に齊院いてはとあるのもこの邊か或は一時皇子御妹の璽子内親王の齋院のお伴をしていた事を指すのかと考える。上東門院への宮仕はやはり當時の女性の憧れであつた如く辨にとつても宿願であつたらしい。(家集68、新續古今)

えに深きいつみの水はありなからむすはぬ夏のいかてすぎけむ

結婚や子供の記録がないし、經信、範永、爲善等の歌から多少の戀愛關係はあつたらしいが他の女房に比しその一生の殆どを宮廷生活に送つたと見ることが出来る。家集冒頭の詞によると晩年尼となつたもののようである。

次に出羽辨の性格について、與謝野氏は清少納言の皮相を學んだ出過ぎた女と評しているが更に考えを要する。出羽辨は社交家であつた。榮花物語や家集にも非常に多くの人々と隔意なく親しみ萬遍なく人好きされる明朗さと親切心があり、贈答歌も非常に多い。人との應待には常に如才なく男勝りできばきと用件を運ぶ機智をもつて居り、一品宮女房として宮家の重鎮であつた。頼通邸に於ける定頼中納言との應接等(歌合)上下の信頼を思わ

せるものである。紫式部を冒し難い知性の人とし、清少納言を稱代の才女とし、和泉式部を熱情型、道綱母を内証性、赤染衛門を實質型とすると出羽辨は純情型という事にならう。三中宮に愛慕一筋で長く宮廷生活續けたことも、時として思い切つた皮肉や子供らしい拗ね方で里に下つて上東門院になだめられたり、男歌人に勝氣で争つたり、得意然となつたり、驚きや悲しみを誰よりも強く感じた人といえる。威子中宮薨去の時は「出羽辨は死ぬべしと人々いとはしがる」程の悲歎の模様で、作歌にも一途な表現が見られる。「晩待星」に「この出羽辨いとをかし」「風流者」なるものから「有心なること出羽の匂ひや色(宮)の<sup>三條西</sup>様も殊になん有る」と殿上の人々云ひけるをききて云々」とあつて梅壺女房と辨の贈答歌が出ているが辨の人柄を評したものである。この「風流者」「有心」は趣があつて人情の世界にも充分理解のある而も思慮の深いことを意味し、「匂」「色」も氣品や容姿の垢抜けた事を指すもので、この記事の寛德頃は辨の五十歳近くで圓熟した人柄と宮廷内の人氣のあつたことを物語るものであらう。恐らく出羽辨は色白々の稍々小肥りし愛嬌のある、年より若く見え而も教養の閃めきをもつた人であらう。

誰かさは語り散すぞ日にそへて盛り過ぎ行く花の匂ひをと女らしさとさりげなく自信の程を詠っている。

佛教關係は家集巻頭に「おこなひに心いりて云々」の詞書があり、自ら經ほとけ作りて供養營み、山里のせうとの許で修行した事があり、又無常を詠つた歌も處々に出て来るし、法華經に關する歌もあり、當時の女性として一様の求道心の深さうかがえる

が特に釋教歌とか佛教觀が強く出ているとは言えない。前にも述べた通り老後入道し歌や述作に心靜かに餘生を送つたものであるう。

知性に就いては、作品は情熱的や思索的に過ぎず抒情の中に知性の眼があり、澄み切つた洗練さがあるやと云える。技巧に凝らず流暢に而も美しく纏め感動を盛り上げてゐる。歌の作法、語彙に富み、歌合等では優雅な中にもきりつと締つた氣品を盛り又贈答歌や感想歌には現實的な器用さが閃めき、機智が人間性の親近を感じさせる。多くの男女と立交つて談話も巧みで指導性があつた。

佛典、内外新舊説話や物語、殊に源氏物語には關心深く讀んでいたらしく、又伊勢の歌古今集等も傾倒してゐたようである。六條齋院歌合の「物語合」に「あらばあふよのとなげくみぶ卿いでは辨」として

つねよりもぬれそふではほとときすなきわたるねのかかるなり  
けり

他に「いはがきぬまのかり」として問答歌二首があり物語創作や批判の才能も優れてゐたと思われる。

#### 〔四〕榮花物語の作者の是非

以上ごく簡単に出入辨について述べたが、最後に古來問題となつてゐる彼女が榮花物語の作者か否かという事について少し觸れておく。今日なお榮花物語の構成、成立及び作者に就いての決定論は出ていないと思うけれども、ここで問題としたいのは出入辨

が榮花物語の續篇の作者であるという樋口宗武（或は契沖）土肥經平、近くは與謝野氏、更に久松氏、松村氏等によつて主張されている高説である。然し私は榮花物語作者複數説にも正篇赤染衛門説にも續篇出入辨説にも一應再検討の必要を感じてゐる。今、出入辨についての疑問をいうと、

一、年代。上述の年譜によると物語完結の寛治六年迄は生存が考えられない。上東門院薨去に關する辨の記録がない。

二、二人以上の作でない。相當長期間に亘り、あの膨大な記述を編纂するには修史計畫や協議や語り繼ぎ等が必要とするが其等の記録がない。短篇物語の編集と異り女房階級の共同事業は當時不可能に近いと考えられる。逸脱、重複、祖語が比較的少く、叙法も文章も著しい斷層や差異が認められない。異本系（三十七卷完）の他は古本系、流布本系も四十卷が餘り散佚しないで一括して世に傳つた點等多數作とは考えられない。

三、出入辨作なら、他に類を見ない多作をのせることは考えられない事である。又、より秀作である歌合の勝歌や家集から主だつた記事を探り入れる筈であるが榮花物語とは重複していない。與謝野氏は辨が故意に自作の重複を避け悉くの作を分配し世に披露せんと意圖したと云つてゐるが自己宣傳とは少し穿ち過ぎた見方と思われる。榮花物語の性質上むしろセレクトした跡があるべきで、此點辨以外の者の執筆とした方が妥當である。

四、文章・文體の上から。出入辨は歌人として又談話（社交性）等は巧であつたが文章殊に長篇を書くに適した文筆家と思われぬ。家集や呂保殿日記等と照して見て榮花物語に通じるものが薄

い感がある。

等が考えられる。更に作者の推定の條件としては、次のことが考えられる。

(一) 作者は一人であること。紫式部が宇治十帖迄を一人で書いたとすれば事實や典拠がある歴史物語の叙述は根氣と努力で取えて不可能ではなく、むしろ二人以上で分筆繼承する事の方に困難が考えられる。

(二) 上東門院側近に長く宮仕えし、道長、倫子系に親近せる女房

(三) 宮廷内で相當權威ある地位の者。

(四) 文、歌才に長じ、専念出来る者。

(五) 交友關係廣く、史實 公私諸日記 家集 談話等を蒐め得る者。

(六) 出羽辨及び周邊に詳しいこと。全卷から見て辨の歌や關係記事が多く、周邊關係が緊密に書かれているので辨に關係のある事。

(七) 出羽辨に好意と信頼をもつた叙述である。辨と生活を共にし敬愛している者の書き方で自慢話とはうけとれない。

(八) 寛治六年以後五六年頃完結。辨と親交のあつた源經信の死(承徳元年)や院政(寛治より始)の氣配に觸れていない。又讃岐典侍日記の嘉承二年二月の條に榮花物語の卷三十三著るは佗しと歎く女房の記事が引かれているのでその十年前頃承徳頃

に世に出ていたと考えられる。

(九) 女性の作であること。後三條帝と頼通の仲悪しき事や政治問題及び前九年(康平五年)後三年(寛治元年)の役等に觸れず

出生・死没・服飾等に綿密で禮讀に終始した叙法である。之等は男性作家を適としない。

以上を綜合すると作者は地位學才があり出羽辨と行動を長く共にした周邊の同僚女房か近親女性が資料や談話を辨が集め提供したものでよつて辨の力を得て書き續け、途中或は辨没し、其後に上東門院や頼通も没したので寛治六年で「紫野」を以て完結としたものであらう。

なお成立に就ても諸説があるが私の師岡一男先生は「蒼花(長和二三年)の卷などに三條帝と姪子中宮の御子禎子内親王(後三條帝國母、陽明門院)の御生誕に讚美をつくし、上東門院の後一條天皇の降誕に比した趣があるのは、後三條帝即位後、國母と仰がれ給うたのを見たものの筆と思われること、同じく師説に、「散佚物語」で松尾聰氏によれば院政期作とされている「初雪物語」が「かがやく藤壺」(長徳四年)に「かの初雪の物語の云々」とあるのは院政期の筆になると述べられ、全四十卷は院政期の作と云つて居られる。前述の諸事情を併せ考える時、私はまず上篇三十卷が院政期頃に成り、續いて續篇十篇が宇治十帖に做つて書き繼がれ、寛治六年で完結し、整理に數年を費し承徳の頃(一〇九七)主要人物の實在中は憚り、没後に出されたもので、讃岐典侍などは初期にこれを入手した方であらう。史實との食違いや男性筆らしい書方のあるのは年月を経て記憶の間違や、典拠、資料の性格が種々であつたこと、關係生存者が少く訂正されない儘傳わつた事に原因があると考えられる。これを要するに、榮花物語全篇の作者は出羽辨ではなく、その周邊にあり、また彼女はただ榮花物語の成立過程においての重要な關與者であるというのが、私の結論なのである。